昭和62年(1987年)7月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

7　JULY, 1987　毎月10日発行　第87号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1987
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12—6
☎(0797)31-3452

選ばれた民イスラエルの子
イエズス
キリストシリーズ ④

1 前回はイエズスの二つの系図について述べました。その一つ、マテオの福音による系図（1・1～17）は、先祖から子孫へと下降するように記されています。つまり、アブラハムから順に、マリアの御子イエズスの先祖がつらねられているわけです。一方ルカの福音の系図は、イエズスから始まりアブラハムへと遡って記されています。

ルカの系図がイエズスと〈全人類〉の結びつきを示すのに対し、マテオの系図は、イエズスが〈アブラハムの子孫〉であることを明確に示したものと言えるでしょう。ナザレトのイエズスは人類家族の一員でありましたが、それは、旧約の選ばれた民、すなわちイスラエル直系の子としてであったのです。

2 イエズスはイスラエルの民の中で〈お生まれになり〉、この民の宗教と文化の中でお育ちになりました。まさに真のイスラエル人で、考え方や言葉も、当時の人々と同じ部類に属しておられたわけです。従って、アラム（アラマイ）語で考えたり表現したりなさいました。また、その周辺の習慣やしきたりにもお従いになり、〈一人のイスラエル人として〉、旧約の忠実な継承者であったのです。聖パウロはローマ人への手紙の中でこの点について強調しています。「彼らはイスラエル人であって、神の養子とされたことと、栄光と、契約と、律法と、礼拝と、約束をもっている。太祖らも彼らのものであり、〈人間としては〉キリストも彼らから出られた〉。（ローマ9・4～5）またガラツィア人への手紙の中でも、キリストは「律法のもとにお生まれになった」（ガラツィア4・4）と書いています。

律法と伝統に忠実を保つ

3 御降誕ののちまもなく〈イエズスはモーゼの律法が定める儀式の規定に従って割礼をお受けになりました〉。このように公に契約の民に加わったのです。「子どもに割礼を行なう八日目になったので、その子の名をイエズスとつけた。」（ルカ2・21）

イエズスの御生涯の初期に関する記述は数少ないのですが、それでも幼年時代に関する福音には次の記述を見つけることができます。「両親は過ぎ越し祭に毎年エルサレムに上っていた。」（ルカ2・41）これによってイスラエルの律法や伝統を忠実に守っておられたことがわかります。「イエズスが〈十二歳になった年に〉、習慣どおり祝日のために上京した……」（ルカ2・42）、「帰るとき、少年イエズスはエルサレムに残られた。両親はそれを知らなかった……」（ルカ2・43）、そして三日間捜したのち「神殿で学者の中に坐り、聞いたり尋ねたりしておられるイエズスを〈見つけた〉。」（ルカ2・46）そして、マリアとヨセフの喜びに重ね合わせるように書かれてあるのが次の言葉です。「なぜ私を捜したのですか。私が私の父の家にいるはずだと知らなかったのですか。」（ルカ2・49）

4 イエズスの幼年期に関することは、この出来事以外はほとんど福音書に記されていません。それは「隠れた生活」と言われる時期で、ルカが簡単にその時期を要約しているだけです。イエズスは「彼ら（マリアとヨセフ）と共に下り、ナザレトに帰って、二人に従って生活された。」（ルカ2・51）そして、「イエズスは、神と人の前に、その知恵も背丈も寵愛もますます増していかれるのだった。」（ルカ2・52）

5 福音書から、イエズスはヨセフの家で〈御自分の家族と共に〉生活なさったことがわかります。ヨセフはマリアの子を助け、守り、少しずつ大工の仕事を教えながら父親の役割を果たしました。ナザレトの人々はイエズスを「大工の息子」とみなしていました。（マテオ13・55参照）イエズスが教えを宣べ始められると、町の人々は驚いて、「あれはマリアの子……ではないか？」（マルコ6・3）と尋ねます。人々は、マリアの名のほかにイエズスの「兄弟」、「姉妹」に触れていますが、兄弟姉妹とはナザレトに住むイエズスの親戚（いとこ）のことを指しています。福音史家マルコによれば、イエズスに教えるのを〈やめさせようとした〉のはその親戚筋だったのです。（マルコ3・21参照）彼らには、なぜイエズスがそのような新しい活動を始めるのかわかりませんでした。イエズスは他のイスラエル人たちとなんら変わるところはないし、また当然そうだと考えていたからです。

6 イエズスが公に教えを宣べ始められたのは三十歳のときでした。そして最初の説教を〈ナザレト〉でなさいました。「いつものように安息日に会堂に入り、立って朗読をされようとすると、手渡されたのは預言者イザヤの書であった……。」（ルカ4・16～17）イエズスは次の言葉で始まる一節をお読みになりました。「主の霊は私の上にある。貧しい人々によい便りをもたらすために、私を遣わされた。」（ルカ4・18）そしてその場に居合わせた人々の方を向き、「あなたたちが今聞いたこの聖書の言葉は今日実現した」とおおせになりました。（ルカ4・21）

7 ナザレトから始まり、ガリラヤ、ユダヤ、そして首都エルサレムにおよぶ〈説教〉の中で、イエズスはイスラエルの豊かな宗教的伝統を大いに活用なさいました。新たな洞察を加え、手がかりとなる意味を示し、預言的見通しを説明なさいました。また契約の神の御計画から逸脱することをちゅうちょせずに戒められたのです。

このようにして、同一の啓示の範囲内で「旧」から「新」への移行を、「法」を廃止することによってではなく、完成させることによって実現なさいました。（マテオ5・17）この考えがヘブライ人への手紙の冒頭を飾ります。「神は何度もいろいろな方法で、その昔預言者を通じて先祖に語られたがこの終わりの日々には……その子を通じて語られた。」（ヘブライ1・1）

キリストに向かって歩みなさい

若者たちへ―①

8 この「旧」から「新」への移行はナザレトの「預言者」の全ての教えの特徴とも言うべきものです。マテオの福音に記されている〈山上の説教〉がこれを〈明白に〉示しています。「知ってのとおり、昔の人は〈殺すな……〉と教えられた。だが私は言う、兄弟に怒る人はみな裁きを受ける。」(マテオ5・21～22)「知ってのとおり、〈姦通するな〉と今まで教えられている。だが私は言う、色情をもって女を見れば、その人はもう心の中で姦通している。」(マテオ5・27～28)「知ってのとおり、〈隣人を愛し、敵を憎め〉と教えられた。だが私は言う、あなたたちは敵を愛し、迫害する人のために祈れ」(マテオ5・43～44)とおおせになると同時に、「私が律法や預言者を廃するために来たと思ってはならぬ。廃しようとして来たのではなく完成するために来た」(マテオ5・17)ともおおせになりました。

9 この「完成」という言葉は、鍵となるもので、神によって啓示された真理を教えることに言及するばかりでなく、イスラエルすなわちイエズスをその子とする民の全歴史にも言及するものです。契約の神の力強い御手によって、はじめから導かれていたこの驚くべき歴史は、イエズスの内にその完成を見ました。〈契約の神がはじめから歴史のうちに示された御計画〉によって、その歴史は救いの歴史となりましたが、その御計画は「時が満ちる」(ガラツィア4・4)その時に向けて準備されていたのです。そしてイエズス・キリストのうちに実現しました。ナザレトの「預言者」は故郷の神殿における説教の中で、その実現をはっきりとお示しになったのです。

10 ヨハネの福音に記されているイエズスの御言葉がそれを雄弁に語っています。イエズスは相手に「あなたたちの父アブラハムは私の日を見たいと思って喜びにあふれ……」とおおせになりました。すると皆が不審に思い、「あなたはまだ五十歳にもならないのにアブラハムを見たのですか」と尋ねると、イエズスは「まことにまことに私は言う、アブラハムが存在する以前に私は存在する」と、明示するかのごとく断言なさいました。(ヨハネ8・56～58参照)　イエズス御自身が、アブラハムの時代からイスラエルの歴史に刻まれていた神の御計画の完成であることを、自ら断言するとともに、御自らが「在すもの」(脱出3・14)であることまでお示しになり、その存在がアブラハムより以前のものであることを断言なさいました。イエズス・キリストは「在すもの」なるゆえに、イスラエルの歴史の完成です。(御自分の秘義によって)イスラエルの歴史を超えられたからです。ここでキリスト論の一面にふれるのですが、それはまたのちに述べることにしましょう。

11 今回は、マテオとルカ二人の福音史家が記す二つの系図を考えて締めくくります。この二つの系図から、イエズスが本当にイスラエルの子であり、イスラエルの子であるゆえ全人類の家族の一人であられることがわかります。アブラハムの子孫であるイエズスのうちに、旧約の預言が完成を見るわけですから、聖パウロの教えに従って、アダムの子孫としてのイエズスこそ、全人類を「集める」ための要、源であることがわかるのです。(エフェゾ1・10)

証人となるには確かな信仰が必要

■証人となるのは、容易なことではありません。

■他の人々と信仰を分かちあうにはどうすればよいのでしょうか？

■神のことを話すと、友人たちはあざ笑うのです。

■世間は科学とテクノロジーの姿をとって、ひっきりなしに私たちの信仰に異議を唱えます。

■私たちはいつも神を渇望してはいます。でも、信じたところで何の役に立つでしょうか？

■キリストを知ったのは、運がよかったからです。

■けれども今、どうすれば「神を生きる」ことができるのでしょう？

■どうしたら、最初のあの情熱を燃えたたせることができるのでしょうか？

■最初のころの愛は、どこへ行ったのでしょう？

■教皇様、他の国々の若者たちも、私たちと同じような疑問を抱いているのでしょうか？

■そして教皇様ご自身も、お疑いになることがありますか？

(教皇様は次のようにお答えになった。)

起きて歩きなさい！」　ペンテコステの数日後、エルサレムで、一人の病人が神殿に入ろうとしたペトロを見て施しを乞いました。ペトロは病人にむかって言いました。「私は金銀を持っていない。だが私の持っているものをあなたにあげよう。ナザレトのイエズス・キリストの御名によって、歩きなさい。」(使徒行録3・6)　ペトロは、イエズスがカファルナウムで中風の人にむかって仰せになった同じ言葉で話しかけました。(ルカ5・24参照)

親愛なるみなさん、ペトロの後継者である私も、今日ここで同じように申しあげます。「起きて、歩きなさい」と。

私は金銀を持ってはいません。出来合いの答えで、みなさんが今お尋ねになった事柄や、一五〇〇通もの手紙で寄せられた質問に対する返答にかえようとも思いません。これらの問いかけを、私は注意深く受け取りました。みなさんの真剣さ、信仰を深めよう、教会と社会における役割をになおうとする心意気が、そこには現れています。みなさんはこれらの問いについて、お互い同士で、仲間うちで、また教区内でお考えになったことでしょう。どうかこれからも教会の中で、友人や司祭、年長の人々と共に、さらに深く問題を究めて行ってください。きっと、答えとなるものが見つかるでしょう。

私としては、みなさん方の問題を、イエズス・キリストの光の中に置いて見るつもりです。私は、キリストの証人としてここへ来ました。そしてみなさんに「起きなさい！」と呼びかけます。自分の弱さや、感じている疑いにもたれかからないで、両足でまっすぐに立って生きなさい。みなさんがすでに持っているイエズス・キリストへの信仰と共に、聖霊の御力と共に、キリストに向かって歩みなさい。キリストと、みなさんの兄弟たちと一緒に、新しい世界を築くために。

イエズス・キリスト、「生きている御者！」(黙示録1・18参照)　ペトロとヨハネにとって、イエズス・キリストは御復活の後、目で見、手で触れ、声を聞いた御方でした。パウロにとっては、ダマスコへの路上で彼を捕え、「私はあなたが迫害しているイエズスである」と仰せになった主でした。スミルナの老司教ポリカルプスは、155年に殉教する間際に「私は86年もの間、キリストの下僕でした。私を救ってくださった王である御方を、どうしてののしることができましょう？」と言いました。このポリカルプスは主の弟子ヨハネを

説教・講話・書簡等の抄訳

知っており、イレネウスとも知り合いでした。2世紀末のリヨンの殉教者たちのある者は、ポリカルプスの故国からこの地にやって来ました。彼らの証言は、主に会った使徒たちの証言とほとんど直接につながるものです。私たちはみな、同じ使徒継承の教会の一員なのです。

意識的に考え抜かれた選択

イエズス・キリスト！　若者たちの、また成人の中には、キリストを見出し、神からの特別な恩寵を受けて生活を一新する人々がいます。この人たちは回心したのです。多くはごく幼い頃に教会を通じて信仰の恵みを受けながら、後には自らの信仰に疑問を抱き、疑いさえ持つようになりました。そして、その疑いに勝ったのです。私にはそれがよくわかります。私自身も信仰に満ちた環境で育ちました。そこから自分を切り離したことはありません。私にとって根本的に問題だったのは、疑いも持たずに受けつがれてきた信仰の道をたどってきたことです。後に私が自ら選び、理解を深めていった、意識的で考え抜いた末での信仰に比べれば、若い頃の信仰は、知的というよりはむしろ感情的なものでした。神は存在するという基本的確信をもとにして、福音と共に、教会と共に、イエズスへの信仰を深めてきたのです。ペトロのすばらしい信仰告白の言葉どおり、イエズスは「キリスト、生ける神の子」(マテオ16・16)です。そしてイエズス・キリストに導かれて、私は御父を知り、聖霊と共に生きるようになりました。信仰は神からの賜ですが、同時に自分自身を捧げ尽くすよう求めます。信仰は愛の内に完成します。「ペトロ、あなたは本当に私を愛しているか？」(ヨハネ21・15参照)　信仰とは、この選択のことなのです。神の愛を確信することなのです。

神はこの世においでになります。去って行かれることはありません。神はあらゆる存在のみなもと、生きとし生けるもの全て、霊と愛である全てのものの源泉です。神の現存を拭い去ることはできません。177年にリヨンの異教徒たちは、殉教者の遺灰を川に投げこんで、これでイエズスへの信仰も撲滅された、と思いこんでいました。が、キリストの復活は異なった力を持っています。聖霊は黙ったままではいません。実際には、リヨンの人々はキリスト教徒になりました。彼らはゴール人でした。現代のある国々では、イエズスの人を魅きつける力は失われ、神の名も人の心から消えたと考えている人々がいます。「神の死」についてもいろいろ取りざたされていますが、神の復活は止むことがありません。多くの人の良心の中に生きておられるのです。

愛するみなさん、キリストはみなさん一人一人にじっと目をとめておられます。それがたとえ誰であっても、福音書の中で若者に目を注がれた時と同じように。みなさんの手紙には、イエズス・キリストと知り合えた幸運について書かれていました。私はもう少し正確に述べたいと思います。それはキリストの現存を知るという幸運、頭である御方に、肢体の一部としてつながっているのだと悟る幸運なのです。このつながりは洗礼によって生じ、私たちをキリストに似たものとします。信じているみなさんにとって、殉教者の時代と変わらず、キリストは教会の中に生きておられます。みなさんは教会です。イエズス・キリストが生きていることを証言する教会なのです。

神はおいでになります。が、私たちの方で留守をすることがあり得ます。神は待ち合わせをすっぽかしたりなさいません。危険は、私たちの方で神と出会う機会を失うことです。(…)聖アウグスティヌスは、幸福を求めて誤った道々を巡り歩いたあげく神に告白しています。

「御身を愛したのは最近のこと。おお美よ、かくも古く、かくも新しい美よ！　御身が私の内に在した時、私は自らの外に出ていました。そして私が御身を捜し求めたのは、その外側だったのです……。御身は私と共にいてくださったのに、私が御身と共にいなかったのです」と。

現代の人々も、宗教的無関心のうちに生き、神を忘れ、神なしに生活を組み立てています。キリストが真理、愛、生命であることを認めようとせずに、幸福へのありとあらゆる道を試しているのです。この人たちが目をさまして、「内にある神からの賜に再び火をともす」力が与えられますように。戸をたたいておられる方、私たち自身よりも私たちに近い御方に対し、注意を向けることができますように！　みなさん方は、無関心ではありませんね。心の奥に神への渇望を感じつつ、今日の無関心に苦しんでおられるのですから。

神について話せば、他人は異論を唱える、反対する、あざ笑う……そのことが、いっそうみなさんの苦痛の種になっていますね。預言者たちも同じ苦しみを味わいました。「私たちの言うことをだれが信じよう？」(イザヤ53・1)　イエズスも「私のために、人々があなたたちを責めるとき、(…)あなたたちは幸せである」(マテオ5・11)と仰せになります。恐れずに、勇気を出して証人となるよう、求められているのです。聖パウロはこのような苦難の中を生きぬきました。本日のミサで、パウロが弟子ティモテオに警告している言葉をお聞きになったでしょう。「神は恐れではなく力と愛と節制の霊を私たちに与えられた。主を証明することも、主の囚人である私をも恥じるな。むしろ私とともに神の力に従って、福音のために患難を忍べ。」(ティモテオ②1・7～8)　リヨンの殉教者たちも、信仰のゆえにこの上なく残酷な責苦を忍びました。苦難の歴史は今日も世界のあちこちで続いています。(八六・十一　つづく)

不変の教え

教会と世界における信徒の召命と使命
〈シノドスを迎えるにあたって〉

第七回シノドス

すでに発表されたように、来る十月には代表司教のシノドス第七回定期総会が開かれ、「第二バチカン公会議二十年後の教会と世界における信徒の召命と使命」というテーマで討議することになっています。

どのシノドスも教会にとって非常に重要なものですが、次回のシノドスは特に重要だと言えるでしょう。「神の民」の中でも一番大きい部分を占める信徒、つまりパン種のごとく内から社会の聖化に招かれている、あらゆる年齢層、社会層の男女に、会議の焦点が向けられているからです。(…)(二・一)

信徒固有のカリスマ

公会議のおかげで〈神の民〉と〈キリストの神秘体〉という織物における信徒の役割に非常に積極的な新しい展望がひらかれました。つまり、信徒固有のカリスマと創意を発揮する道が開かれたのです。

公会議の貴重な遺産がすばらしく豊かな実りをもたらしたわけです。

信徒は、教会生活により広く、より積極的に参加するようになりました。このことは典礼において明らかですが、要理指導や様々な形の使徒職においても同じことが言えます。なかでも、教会が連帯の精神で提供する全体的な救霊の使命においても顕著であります。

積極的な現象の一つは成人の間にも若者たちの間にも発展している会組織です。新しい運動が生まれ、会員の豊かな霊性を追求し、より一層寛大な福音宣教の活性化をめざして、キリスト者の共同体が自発的に創立されました。あらゆるところでの女性の、特に母親の貢献は決定的なものです。(二・八)

影

1 信徒に関する公会議の指針を具体的に適要すると、教会の存在をより際立たせることができます。前回、私は肯定的かつ励みとなる種々の動きを強調しました。ところで本日は、光のある所に必ずある影についてお話したいと思います。

現状を総体的にとらえ、客観的に究明すると、公会議の教えや諸文書の適要に際して見られる困難やある種の偏向は、多くの場合、公会議の精神と教導職が定期的に提供する説明に反する断片的であいまいな解釈から生じたものであることがわかります。

2 その結果、興味深く効果的な着想や提案に加えて、信徒の召命の真の本質に関して混乱をもたらす疑わしい解釈も出てきました。

ある面を強調しすぎた結果、他の面を無視してしまうことにもなり、二つの極端な傾向があらわれたのです。すなわち、信徒の使命をヒエラルキア(位階制)の機構の中にのみ閉じ込めるか、あるいは信徒の文化的社会的義務を信仰から切り離すことによって教会組織全体の生命力に害を与えるかの両極端です。

しかし、その原因の一端は、公会議の与えた司牧指針があまりにも新しく、知られていなかったという事実にもあるでしょう。長い伝統をほこる考え方に影響を与えたのですから、色々と問題がでることは避けられないでしょう。一時は、主体性の危機とまで言われました。

特にひどい影響は、世界との関係を考える態度にあらわれました。主が厳しくとがめられたこの世の精神に、嘆かわしい譲歩をすることになってしまったのです。聖パウロは主の非難を次のように強い警告にあらわしています。「この世にならうな！」(ローマ12・2)と。

3 と言っても、よいパン種はネガティヴな面以上に広がってきています。十月に開かれるシノドスは、現状を検討するのに特にふさわしい「場」となることでしょう。(…)

「キリスト信者の助け」という甘美な称号でお呼びする聖母マリアが、この緊急な仕事にたずさわる私たちを助けてくださいますように。(二・十五)

信徒とは

1 信徒に関するシノドスの準備をしている私たちが公会議の文書に戻るのは当然であり、また必要なことです。これらすばらしい文書には多くの要素が散在しており、それらは全体としてカトリック信徒の固有像を見事に浮彫りにしてくれています。

しかしこう言っても固定化された説明をしようというのではありません。そこには生き生きとした動的な要素があるのです。湧き出る泉のように澄みきった活気を有するものです。教会の創立者であるキリストにまで至ることのできる特別の泉、そしてキリストを通して神という第一の源泉にまで到着できるのです。

2 信徒とは？

この質問に答えるに当たり公会議は、信徒とは、司祭や修道士、修道女の身分に属さない人々である、というような否定的な説明の仕方はしません。逆に、公会議はまことに決定的な展望を開いてくれます。すなわち啓示に含まれている〈神の計画〉という面から見ることによって、信徒とは、ヒエラルキア、聖職者、修道者と共に〈神の民〉であると答えるのです。

基本文書である『教会憲章』は、〈教会の秘義〉を三位一体に起源をもつという点から始め、霊的かつ目に見える現実としての〈キリストの体〉に至るまで考察を進めたあとで、〈神の民〉というテーマを深く追求しています。この民が教会、しかも一致し秩序立った民です。様々な目的に向かう個人の集まりや形のない群衆ではありません。真の民です。すなわち、父なる神を起源とし、唯一の道なる贖い主キリストを共通の道とし、神との最終的かつ至福の出会いを共通の目的とするキリスト信者の男女のあつまりなのです。

3 信徒はすべての面で「全人類にとって一致の最も堅固な芽ばえである。この民は(…)キリストによって設立されすべての人の贖いの道具として採用され、世の光、地の塩として全世界に派遣されている。」(『教会憲章』9)　特権を受けた民のメンバーである。この民の「構成員は共通の品位を有し、神の子らの恩恵も共通、完徳への召命も共通であって……民族、国家、社会的地位、性に関しては何の不平等もない。」(『教会憲章』32)

すべての活ける組織について言えるように〈神の民〉においても必然的に多様な仕事があります。しかし、「すべての信者に共通の尊厳と働きに関して真の平等性がある。」(同上)

4 主の民。(詩篇95(94)・7)

「主はわれらの神、われらは

聖母マリア、キリスト信者の助け、次回のシノドス準備期間に私たち皆が、特に信徒が、神の民の使命に充分に参与すべく受けた信徒としての召し出しを一層深く理解できますように。(一九八七・二・二十二)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393